Guide for Prayer Leaders

先唱奉仕者の手引き



カトリック南山教会

2016.06

先唱奉仕に関する一般的なお話

「先唱者」、「先唱」ということばは、共同体によって、使われ方がまちまちのようです。詩編の部分を歌う人や、ミサ賛歌の出だしを歌う人を言うところもあれば、聖歌の番号や立ったり座ったりの案内をする人を指す場合もあるようですが、後者は、『ミサ典礼書の総則』で言う「解説者」に当たります（同書１０５ｂ参照）。ここでは、答唱詩編の詩編の独唱者、入祭・奉納・拝領などの行列の歌の詩編を歌う人、さらに、共同祈願や教会の祈り、さらに、歌唱ミサを基本としたミサ賛歌の先唱を考えます。

では、「先唱者」とは、もともとどんな役割を持った人だったのでしょうか。中世後期まで、教会では、楽器の伴奏はありません（ア・カペラ）でしたから、誰かが、聖歌の最初の一節を歌い始める必要がありました。グレゴリオ聖歌などでも分かるように、歌いだしで、聖歌の旋法が指示されますし、テンポを決めるのも先唱者の大切な役割でした。つまり、先唱者の歌いだし如何で、その聖歌の出来不出来が決まってしまったのです。現在では、たいていの場合、オルガンなどの伴奏楽器が前奏を弾きますが、『ミサ典礼書の総則（暫定版）』１０４でも、「会衆の歌を指導し、支えるために、先唱者または合唱指揮者がいるとよい。そればかりではなく、聖歌隊がいない場合には、会衆の参加を得て種々の歌を指導するのは、先唱者の務めである」と言われています。ここでは、ローマ典礼の伝統で、無伴奏のグレゴリオ聖歌が基本になっていますので、オルガンについては触れられていませんが、オルガンの前奏がない場合は聖歌を歌い始めたり、音を出したりすることはもちろん、合唱指揮者がいない場合は会衆をリードし、聖歌隊がいない場合は、会衆の指導し、詩編を歌ったりと言うように、先唱者は、非常に重要な役割を持っています。

南山教会における先唱奉仕者の役割について

南山教会の先唱奉仕者は、主日のミサでのアレルヤ唱(詠唱)、答唱詩編の詩編の独唱、ミサの前に奉げる共同体の祈りの先唱奉仕、共同祈願の先唱、特別な典礼での奉仕に貢献します。この冊子では、主日のミサに関して、9:３０のミサを例に、その所作の参考にするとよいであろう事柄を写真や図入りで解説しています。ここに書いてあるからこうしなければならないというのではなく、実際にはミサの捧げられる場、ともに奉仕する人どうし、どちらかが相手にあわせ、お互いにちぐはぐにならないよう支え合って行ってください。

聖ミカエルの祝日に…典礼委員長　新内飛鳥

先唱奉仕者は、
信徒側の祈りの「導き手」として、
祈りを「先」に「唱」える「者」です。

奉仕の内容

○ ミサ開祭10分前に、香部屋で、司式司祭や他の奉仕者と共に「典礼奉仕者の祈り」をしてから、打ち合わせを行うこと。（９時３０分の主日ミサと四旬節の「十字架の道行の祈り」を担当の場合は除く）

○ 準備された「聖書と典礼」が当日のミサのものであることを確認すること。

○ 祭壇の6本のロウソクの残長を確認し、必要に応じてロウソクを交換すること。

○ ミサ開祭5分前に祭壇のロウソクを灯すこと。
ただし、ミサの前に祈り（「教会の祈り」、「ロザリオの祈り」、「聖母月の祈り」、「十字架の道行の祈り」など）がある場合は、祈りの5分前に灯します。

◎ 9時30分の主日ミサの前に、ミサ前の種々の祈りの先唱を担当すること。「教会の祈り」と5月の「聖母月の祈り」は約10分前から、10月の「ロザリオの祈り」は約15分前から始めます。

◎ 四旬節には、「十字架の道行の祈り」の先唱を担当すること。土曜日17時のミサ、日曜日9時30分のミサの約20分前から始めます。

◎ 答唱詩編とアレルヤ唱（詠唱）の唱句を歌うこと。（答唱と「アレルヤ」の部分を会衆が歌う。）

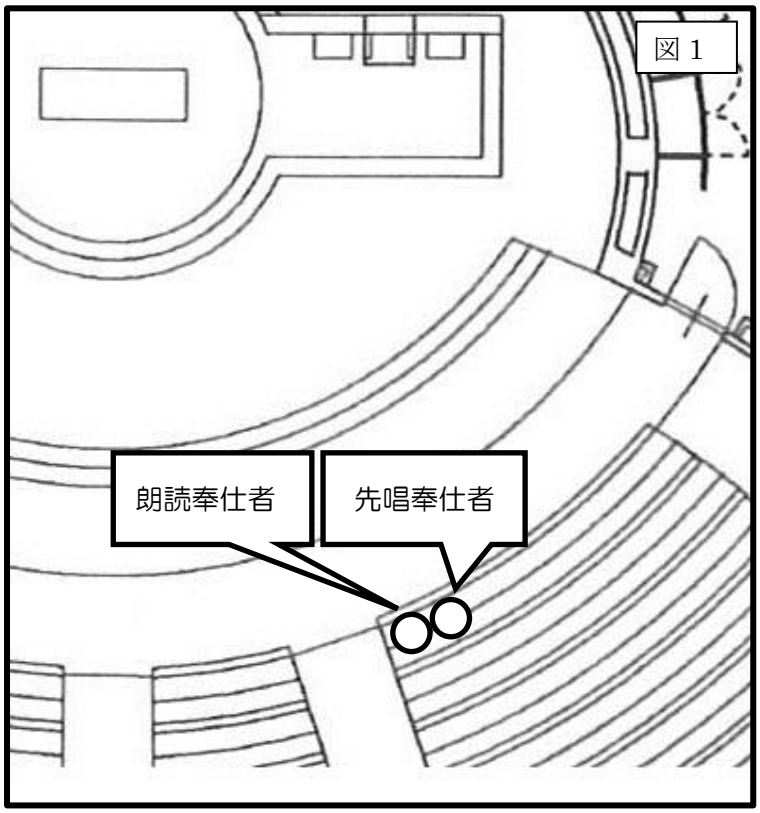
◎ 共同祈願の意向の先唱を担当すること。

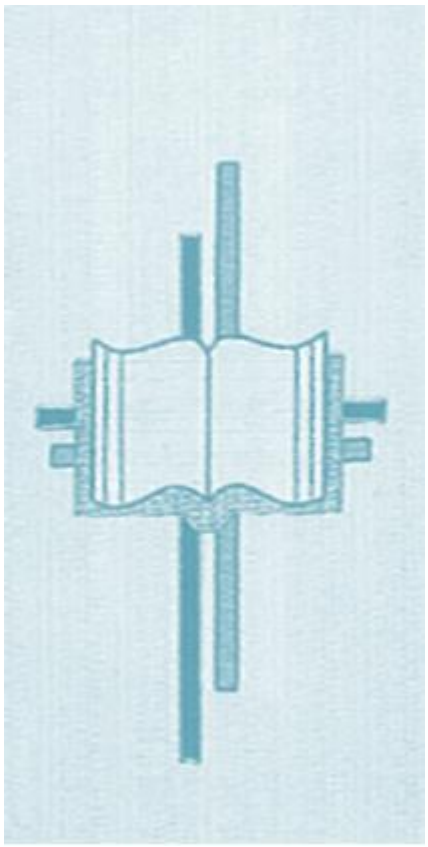
◎ ミサや他の儀式の式次第に従って、先唱を行うこと。（「あわれみの賛歌」や「平和の賛歌」を唱和するときの先導役や、入祭唱や拝領唱を唱えるときの導き役をすること。）

○ 後奏曲の演奏が終わったら、ろうそくの火を消します。

○ ロウソクの交換をした場合、ミサ後などに、ホルダーにロウソクを補充して次回の使用に備えること。

◇ 座席





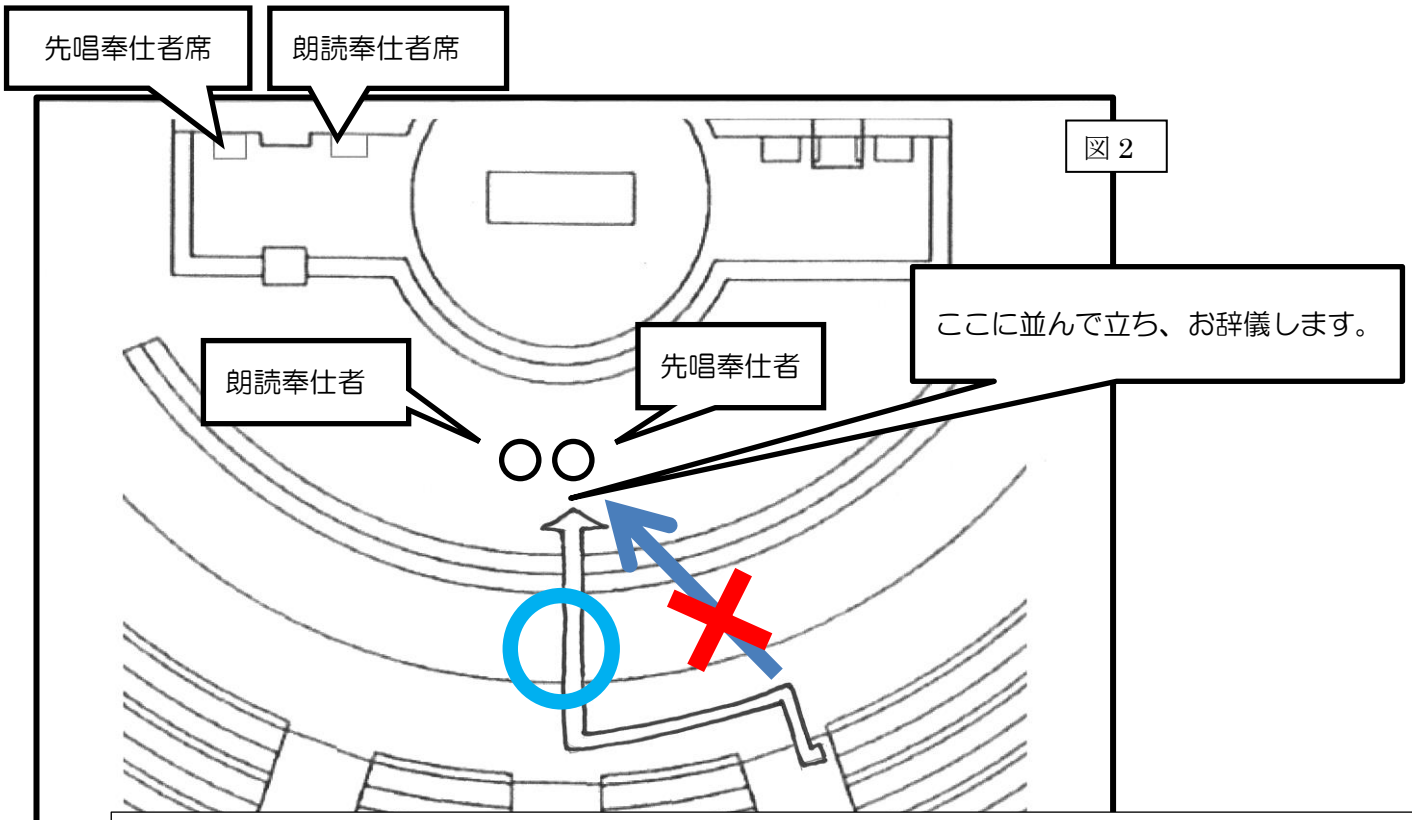
朗読奉仕者と並んで座ります。
ミサ前の祈り、共同祈願の先唱はここでします。
内陣での席は朗読台の近くに用意されます。

◇ 答唱詩編、アレルヤ唱(詠唱)は朗読台で奉仕するために内陣に移動します。

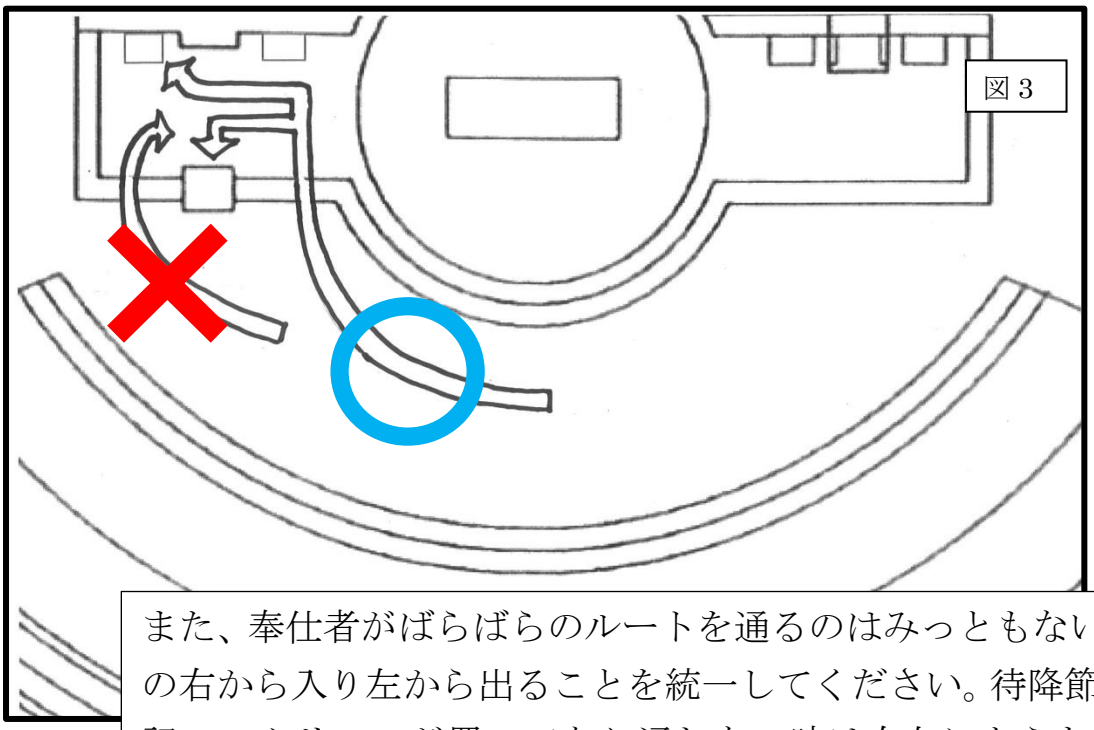
◇ 先唱奉仕者は当日の聖書と典礼を捧持します。



◇ 内陣への移動



お判りとは思いますが、典礼の場面ではダイレクトな近道は望ましくありません。通るべき道を通り移動してください。歩行がゆっくりな方であってもあわてなくて結構ですから堂々と中央から登壇してください。



また、奉仕者がばらばらのルートを通るのはみっともないですから、朗読台の右から入り左から出ることを統一してください。待降節の馬小屋や要約筆記のスクリーンが置いてあり通れない時は右左にとらわれずにルートを変えてください。ただし奉仕者のルートを揃えてください。

◇ お辞儀について

先唱奉仕者は内陣で２回のお辞儀をします。
１回目・・・内陣に上がった時に祭壇の前で祭壇に、またその奥の聖櫃のイエス様に向かって。
２回目・・・アレルヤ唱が終わり、内陣から退出する前に祭壇の前で侍者、司祭、朗読奉仕者とそろって。



※ 朗読奉仕者は、朗読の前後に聖書への表敬として朗読台でお辞儀をしますが、先唱奉仕者は朗読台でお辞儀をする必要はありません。

◇ 先唱者は、第１・第２の朗読が読まれた後、適度な沈黙(長くて 30 秒程度※数える必要はありません。)を保つようにしてください。

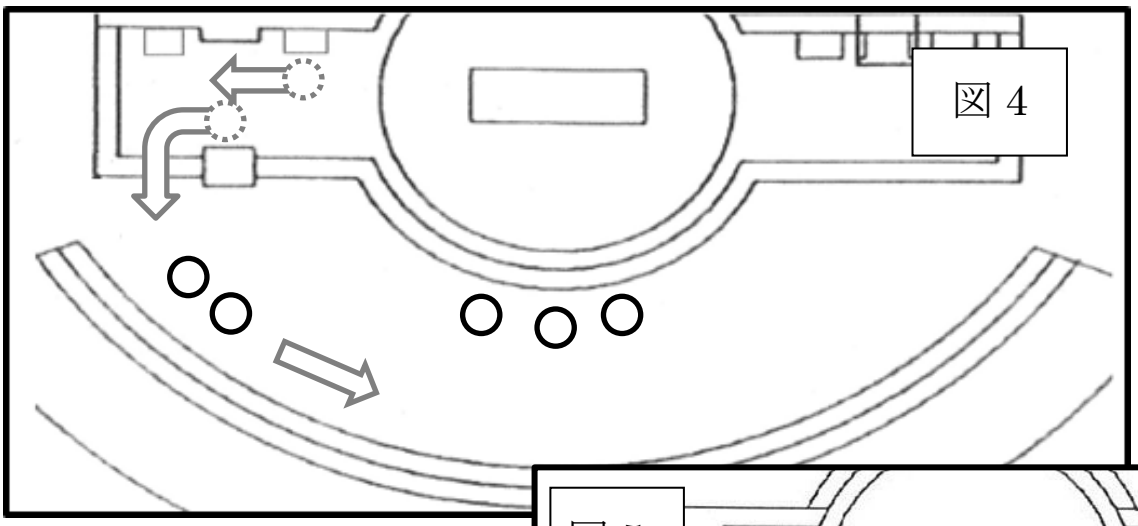
◇ カントーレとしての役割・・・

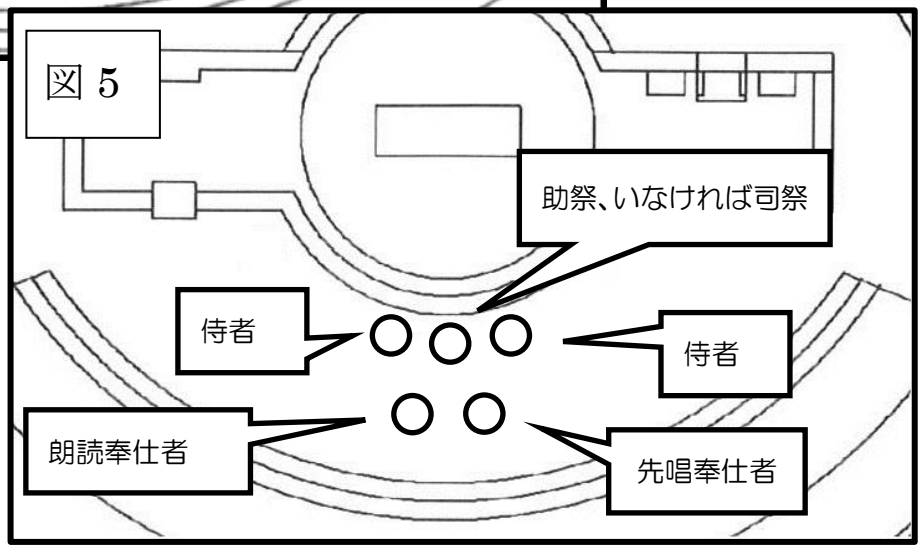
会衆が歌いだすために独唱し、会衆をリードします。

- 答唱詩編では、冒頭の答唱句、および詩編を独唱します。（※ 冒頭を除き、答唱句は歌いません。）
- アレルヤ唱では、冒頭の「アレルヤ」の部分、および唱句を独唱します。（※ 末尾の「アレルヤ」の部分は歌いません。）
- 四旬節の詠唱では、全ての唱句を独唱します。（※ 会衆は歌いません。）

会衆が歌う部分では、先唱者は歌わないようにしてください。対話の形を崩さないためです。

◇ アレルヤ唱(詠唱)が終わると会衆席に戻ります。
祭壇前で助祭（または司祭）や侍者とともに並び、お辞儀をします。
アレルヤ唱(詠唱)が始まると侍者と助祭(または司祭)が大聖書を運ぶために祭壇の前に集まります。先唱者はアレルヤ唱の唱句の部分を歌い終えたら、会衆が終わりのアレルヤを歌っている間に朗読奉仕者とともに祭壇前に並ぶ侍者、司祭の後ろに並びます。



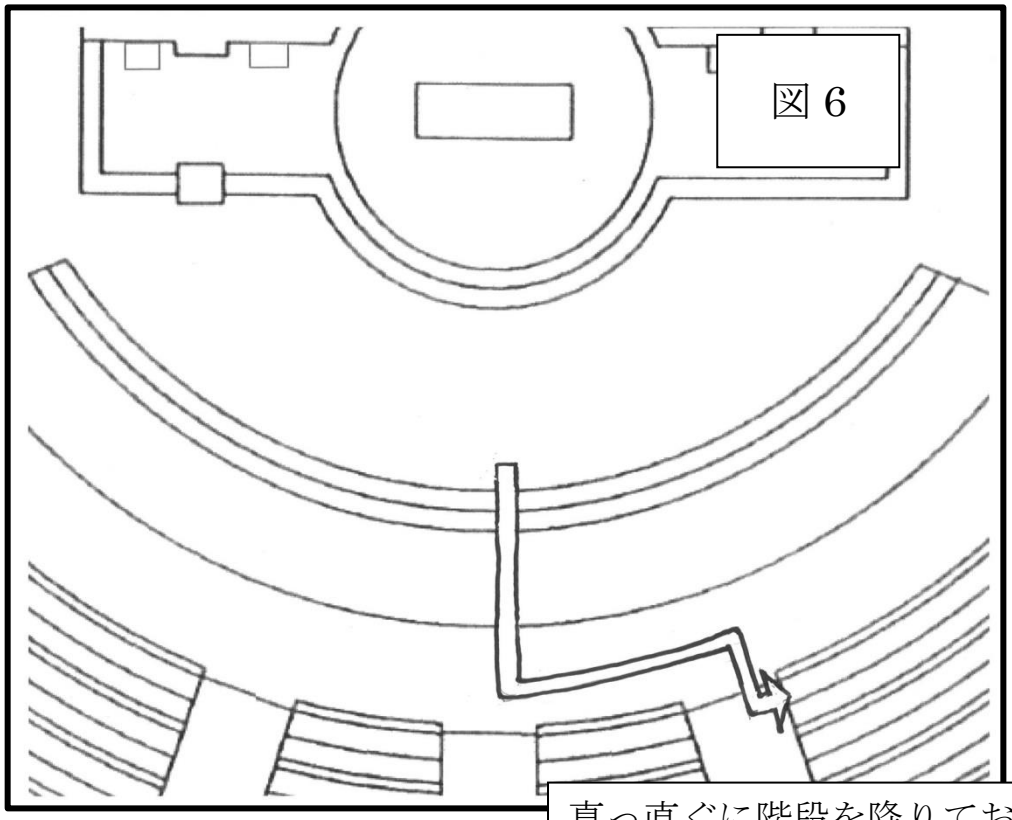






助祭または司祭が聖書を掲げる時に、先唱奉仕者、朗読奉仕者はお辞儀をします。
※侍者はろうそくを持っているのでお辞儀をしません。

◇ 会衆席（奉仕者席）に戻る道



真っ直ぐに階段を降りてお戻りください。
斜めに近道でいかないようにしてください。

＊＊＊

繰り返しになりますが、ここに書かれていることは南山教会で構築されたスタンダードです。教区で集まるカテドラルのミサや他小教区では微妙に違う伝統や習慣もあります。また、同じ南山の信徒でも学んだ時代によって異なる感覚を持つ方もいます。ここに書かれていることが全てではないという認識に立っていただくようにお願いします。一致の証であるはずの典礼が論争や分裂のきっかけにならないように祈ります。